

菊流

かぞ袂せん

下上

特別  
5  
6189





月か世か小か整か〜次か毎か身か見か事か〜更か也か人か  
 毎か子か整かりかのかゆか世かにかんかるかるかもか也か也か  
 乃か浮か梅か小か町かハかすからかれかのか美か女かとか傳かへかてか繪か小  
 書かりかるか。衣か紋か靚か粧かとかるか發か見かんかごか事か〜とか也。  
 達か逸か子か千か嬌かとかあか〜ハか。今か身かるかるかハか再かもか魂か  
 とかたか也かトか世からかるか。是か美か形かみか〜とかあか名かとか魂か  
 すかまかあか〜次か歌か了かとか弄か〜酒かをか〜とか也。  
 時か〜とかあかまか〜。風か流かのか女かとかあか〜とか也。情か常か  
 ちかあか〜とかあかのか川か〜とかあかとか煙か〜とかあか歌か仙かとかもか

一好



と和歌のさうにれが女れは等しからざる  
すゝも時つらうもの古今法蘭西の作者を  
集め風流とあつたあの中より瑞麟の女  
とありて道母たぶらふと持たれは何ら  
等しにるるもあつたあ世への集束とゆる  
されぬ身へなるるれは片室乃女馬かこも  
はまのむれはまよふ守け榮島乃あつたあ  
跡けのむかたよと山窓乃曙よりう有に  
とありてあ身へぬ那吉れ海乃とあ草とと

兼向乃あよりとたなぬ海へもや都ふ  
何則をあ名れは様もああもと春秋のあ  
衣物衣好し月乃ああ西ととああ虫あ  
何とありあ物け風俗なればび及ふ入書と  
いふもああすあ娘ふとんせなる



伴崎山園の女也  
 今も一輪の世に  
 信来とと名を  
 吟乃と名を書き  
 女はこれに重然と  
 不れ神山のま  
 てゆきまは一  
 句か

吟乃  
 重然

女

吟乃

伴崎山園

光貞書



頼皮也  
 つらきつら  
 やさしき  
 入すも  
 ちりせ  
 けり

頼皮也

つらきつら

頼皮也



吟乃



浄歌の意を孔が其に  
 付てあしと初る色打  
 かへす術は此如房が  
 里の地帯もあつては  
 付かすつゝ増え此類を  
 名へたつゝ一は去捨の事  
 再なり入るゝは物向也  
 あつてはとあつては

初や  
かきこ

女  
いふ

な

女  
いふ

後女  
ま



東の海屋也十三歳の  
 時電同山の寺優て後  
 香の玉とかがうけま  
 くと

仙洞の浄線歌とあつた  
 了吉公のしる家事と  
 一はあつたは都と  
 川さばるる也

あ  
いふ

女  
いふ

女  
いふ

女  
いふ

初女  
ま



奥山の梅も梅とそその  
 白ひめんとまゆをう  
 丹波乃振家の里に栗  
 より卯とさぬ野更  
 とさる御膳のたつり  
 いちご身まき死なより  
 形と身ん相るし美乃  
 事いづから次

梅<sup>むめ</sup>香<sup>か</sup>の

ねま  
 さる魚の

袂<sup>たもと</sup>あね  
 膳<sup>すてん</sup>か



軍の女し親母の世傳  
 中流乃ひうし流き  
 つくまにゆきす  
 女れ乃焼山し  
 伝はれぬれぬれ  
 どもあつる新道入  
 とあつるせり  
 一伝筆をきき  
 美の向か

孝<sup>こ</sup>女<sup>にょ</sup>

衣<sup>い</sup>時<sup>とき</sup>  
 手<sup>て</sup>乃<sup>の</sup>  
 梨<sup>り</sup>の  
 乃<sup>の</sup>  
 深<sup>こほ</sup>物<sup>もの</sup>  
 屋<sup>や</sup>



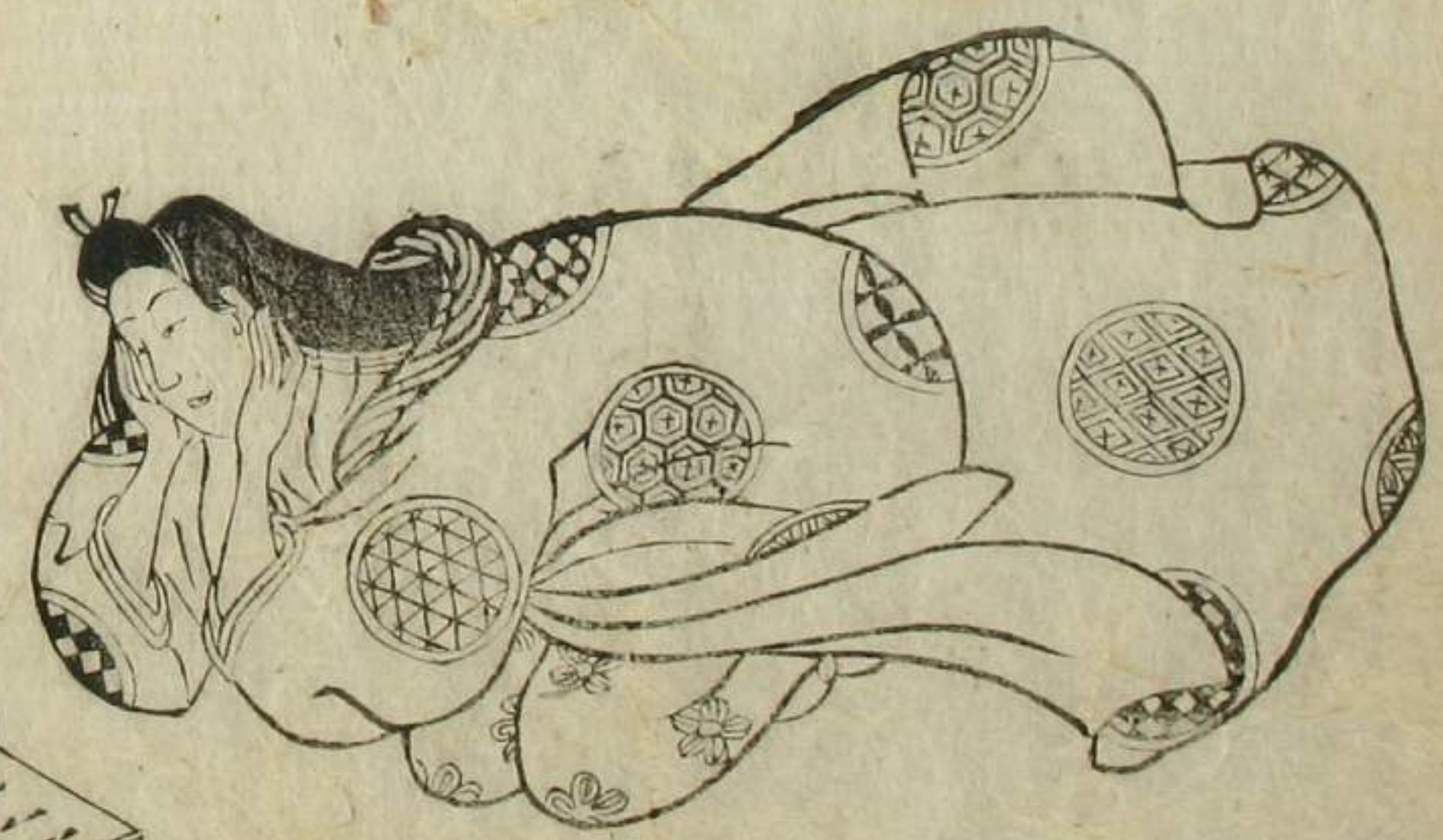
清乃池田孔里の女也  
 有歳より筆通多そ  
 歳中その中筆通多そ  
 の人目をそつぬとり火  
 乃新母二十代集より  
 吾乃子といふたつ他  
 然も作意也わつ春毎  
 の中をわつれ妙子  
 印心ありせて

年女

みゆりし柳の

水油

水油



ありとありと井桶は一向  
 如乃てつうき思ひより  
 とそ縁合百今母は筆  
 せし後と句帳にあは  
 入るるわつりなは

吉野山

見越

見越

福式

好女





羅成ふすしとて  
 御名母心きくほくさ  
 三圃三吟集ゆもん  
 一也大板御心ゆい  
 之海若きゆ月れ  
 ねんひやまきく  
 みしに海山のあけが  
 のみ名所

有  
 こくろ

い  
 海  
 心  
 ち  
 こ  
 ろ

春  
 草



肥後の國の地也若  
 より御持の道ふん  
 よせせ名あつれも  
 新百八向入ぬあけ  
 筆とんこんせ  
 古尋小坂中つら  
 みるらむ世あはけ  
 ゆるみたりぬ

一  
 直  
 書

こ  
 こ  
 こ

こ  
 こ  
 こ

こ  
 こ  
 こ

こ  
 こ  
 こ



此乃初巻代の如也  
 和歌の浦より  
 せりしめ  
 是も中のみゆきて都の  
 句はふきりしき作  
 とてんせらる。

一入子  
にりむすめ

嫁り  
 神の  
 玉津浦  
たまつり



泉乃初巻の如也  
 世乃古事  
 身亦何處  
 母と海  
 多末はははの具  
 たり

松安書  
まつやすま

海  
 貝  
 揚  
 貝



宮田古ハびん人トナリ乃  
 蓬萊山ニ居ル代ノ久  
 シキおれす懐しく  
 とららふの春をいふ  
 ハ如んれ志のゆりく  
 久し知事向より世  
 事乃わくをわす  
 けつゝあまらる。

と  
 一  
 極の

あ  
 の  
 あらゆる

あ  
 の  
 物

魔  
 女



羨慮の玉浦きつこの  
 如也草ゆりきいさふ  
 作たうらゝ軽き能  
 ともてあそひる程の  
 月もむらゝ思ひあはれ  
 乃麗小ぢうき世の  
 若水もすびてまをせ  
 けり

あ  
 の  
 花

あ  
 の  
 花

あ  
 の  
 花

あ  
 の  
 花

里  
 女



誰彼も女也い  
 子女此能端千  
 世方くる時より  
 らんぎたんのい  
 あんー大板古歌  
 少もんつらう  
 大も徳也と加筆  
 一ゆきや

ほうに  
方女



のま  
軒乃書と

ろれい  
 もあや  
 め

誰彼も女也い  
 世のたやう一時  
 をせしめ男乃す  
 向めらるるや  
 一屋の同じさ  
 作者之付合集  
 一んわらう

袖  
たか  
や

東  
た  
の

かしき

もの

あがによ  
藤女



紀前若山子あやしく  
 也國中にもまはるる  
 筆も若村子曲るるの  
 りもとつてさへ船な  
 ましかならひ力をか  
 大も船あつたやせ  
 船信あつたあつたさ  
 ころしや

月

糸

か

儀

か

あ

隣寶



河内國三宅村の女  
 たり若手時人のり  
 張るふたはけき法師  
 写したるのあつた  
 屋のあつたき世を  
 したるは松の連能  
 かむうりことかき  
 秋の風情のを  
 ち

永寛

あ  
 見  
 糸  
 糸  
 糸



律の國水邊の里に  
 野人乃娘也か女れ時  
 より歌乃の海もあふ  
 あつて〜後乃年々さ  
 し松の音と世わか  
 海〜くろ月さあて  
 さあ〜らるるあめ  
 らの程〜して〜さ  
 し〜心あぢさるる  
 ね〜〜〜びらま  
 び〜〜〜に物りし

林女



袖を汗とみみと流す  
 みる川

みる川

此乃國の京都の  
 人々奇人なり日ま  
 ま〜と〜あ〜い〜  
 月ありか〜〜法園よ  
 子あ〜集あ〜を  
 子あ〜〜〜心

輝貞女



頃

頃

頃

頃

越前の園福のゆめ  
 かくるまにほかりのき  
 もとまふりりりりり  
 みおろくふれ事巨  
 初なる人へ海平に能  
 向るまにこれバモ  
 入せり

横巻

浪子

らんがれぬ

若し棚

二重巻



後河内府守り乃高  
 も越の長者れす高  
 たり今ふら電細や  
 ちかしまりくつ女も  
 少くう人ふゆえ  
 東武子りぬ十三乃時  
 古里れぬ山の句集ふ  
 入る

勝女

天人の

白粉の

梅

高



尾易執田の女也神不  
つるへ一華娘たするか  
子に能器のた文  
向懐もに必を御重  
いとやうき作若  
なり

傳女 でんによ



友よ

今

よひつきの

淡

千

鳥

津の國住をれ里に住  
海一花むく一世人  
乃ちをなすまあしとれ  
なりし一老をぬる後  
あまむねのちりりお  
乃ちかうね今に能器  
いすては向懐もに必を  
のすんまう此作若

金女 きんによ



佛 ぶつ

佛 ぶつ

の

の

の



糸島津のすゝめは  
 うへへのまゝに  
 一と入りのまゝに  
 着歌ふかきけは  
 ちんちんたるの  
 小娘はよき人の  
 一と入りのまゝに  
 幸一都のまゝに

仙

小娘  
 小娘

西の月

月乃

鏡乃

女



十五

糸島津のすゝめは  
 うへへのまゝに  
 一と入りのまゝに  
 着歌ふかきけは  
 ちんちんたるの  
 小娘はよき人の  
 一と入りのまゝに

西雨娘

あら

後帝

乃



山城の園字は乃里れ  
 女也母れ親よりも  
 よく書しかば以筆を  
 ありて世を名をせし  
 人なり信じて掛て  
 の信ありて春句とも  
 又之信る

名月丸

あかし

あかし

と

目山

久女



都は後徳の女也母を  
 よすきとの母を兄を  
 け膝をさしし女を乃  
 石原山乃の山乃あり  
 と秋の山乃あり  
 かく世れありて  
 信の春句ともむすび句  
 信ふとて名をせし

六女

あかし  
 ちし  
 秋の  
 本く乃  
 風



長濱の山乃川の舟也  
 唐國の人との詩をう  
 へて和歌よみよの舟を  
 吟へて船中にも一作あり  
 之を各句とも後集  
 再んて一也志すも  
 かしき事てもさなりけり

花を

香や  
 物乃  
 花の  
 あり  
 あり



大坂新町の舟の舟也  
 万華の舟の舟なり  
 ついに佳と舟とを  
 んれ舟の舟の舟と  
 舟の舟と舟の舟と  
 又時能舟の舟の舟  
 舟の舟の舟の舟  
 舟の舟の舟の舟

夕音

梧乃葉と

袖の  
 紋



江戸の吉原は花の地  
 下りて多めき御持  
 下りて長良脇をさせ  
 一幸きあふあつ  
 けり春は初輪あけ  
 屋の門をうりて海め  
 てあかしの二句おし

吉原



かぶろ  
手鏡

是そ

のの  
子目れ

あそひ

もの

東三筋町のゆかぢ  
 よろ川の世ふかぢ  
 奇乃乃たあそびとあ  
 びあかぬきあそびと  
 人あそびあそびと  
 そろそろあそびと  
 多形多形あそびと  
 よろよろあそびと  
 て吉原のあそびと

吉原



いろす  
久波あそび

風れ

福

かあ

伊勢の十殿乃南小  
 つへし一也と多也  
 してて居るもあま  
 了物をも書後ハ能  
 借身成とすれを  
 をむらら由所よふぬ  
 人も是もよき  
 行もや和國の風俗も  
 よるくも伊半  
 及れ地

伊勢の十殿



あかみ  
大福や

かき  
神の法園の

あかみ  
庭宮

南於百歩が山河の初  
 うけよかこむうとら  
 けとふたの位たま  
 腰ちり名承のたま  
 みのり佛の御もき  
 糖入のたれと  
 毎年夏冬向一多  
 寺社ふ奉納かま  
 とした

あかみ  
妙座



あかみ  
梅や

あかみ  
百目

正德<sup>五</sup>未<sup>レ</sup>曆九月吉日

伊丹屋新七



